

富士の人穴

五ノ



富士の人穴

都留文科大学附属図書館所蔵

治承元年三月三日

平家朝臣右大臣

平家朝臣右大臣

平家朝臣右大臣

平家朝臣右大臣

平家朝臣右大臣

平家朝臣右大臣

平家朝臣右大臣



ゆきかたなごそあがーたまひる  
かると海あさるなれにあま  
まれーみるーははる八守つら  
いものほくれたちまをまの  
すくし海あまのいふおの  
平をとまことふんでかん  
たごまーのあまのいふおの

諸侍れみよあてたさあそく  
まはるこしみせんのあまのいふ  
ほくちくあまのいふあまの  
まれおひるてあまのいふ  
あまのいふあまのいふ  
平をとまことあまのいふ  
りまのいふあまのいふ

まゝに心の中へ一田石くありてを殿とせ  
おふちのうらなをさそかぢり〜と打  
舞ひ立てハ平を殿とあるむまゆも  
むちとやあてあ〜ちあふふれを〜  
く〜なるもむらふと〜るを〜  
そ〜が〜もみ〜た〜あ〜の〜  
た〜く〜なる〜るみ〜た〜あ〜る

た〜く〜あ〜あ〜て〜は〜な〜い〜名〜を〜あ〜こ〜れ〜  
ろ〜の〜名〜を〜う〜あ〜り〜と〜あ〜平〜を〜あ〜る  
目〜れ〜を〜あ〜く〜い〜に〜あ〜る〜と〜あ〜る  
か〜ふ〜も〜い〜ふ〜る〜あ〜あ〜い〜か〜い〜と〜あ〜る  
ふ〜く〜と〜あ〜あ〜た〜る〜と〜あ〜る〜中〜白〜れ〜を〜た  
た〜は〜あ〜あ〜と〜む〜せ〜ん〜で〜あ〜ふ〜る〜あ〜あ  
ま〜れ〜く〜〜た〜か〜く〜あ〜白〜金〜地〜り



たるよしくなりし世をいふなりし世  
みどりあまのこはれ風ぬきあはれ  
まきわたりあかきわさとみこ  
よまのしん八あるまのしん  
みこあまのこはれ風ぬきあはれ  
うりよれまのこはれ風ぬきあはれ  
いかに海に十二そとく世くあはれ

女白身れしむるよふよふひと  
そととたたくてたれまのこはれ  
何者かよのこはれ風ぬきあはれ  
たるぞとつりあはれ風ぬきあはれ  
念ふにれまのこはれ風ぬきあはれ  
和国れまのこはれ風ぬきあはれ  
志先したるよのほかひなる







者は事とまじくはれぬふ思ふ中へ  
下領子百所梅る申是小今也旨  
所たまりなごし松尾松本之れ  
子去小所づつとせばやと家  
縁念願く来り清道かまふあり  
しあるは忠徳は我清判といひ  
留されく定へ今よ見申中上道に

杉家子よ志免一清道にかさ祭な  
忠徳宿而いり申房ふかす判りる  
杉家れゆと家り留されく入  
中着岩屋あそ志一たるも可徳之  
乃子去小今所づつとすす一松徳を  
うへ志と申と思ふなりとす也  
諸由れ侍る申れ忠徳小くし

昔よりそむきてもちあふなき  
まにれあふあり夜あふあふま  
い人官いいふまからる  
まいまい新田に日にまままま  
いいいいいいいいいい  
白白白白白白白白白白  
びびびびびびびびびび

とむきんあふふも積れくあ  
たかくたたかくたたかくたたかくた  
おれたあおおれたあおおれたあお  
いいいいいいいいいい  
二二二二二二二二二二  
たたたたたたたたたた  
ちちちちちちちちちち

山得とて岩をよき入ふらむ  
入見道バかふもあしちかきぬき  
ふらむちけいし道ぞもたふし  
又西國中ゆきこれバ日本  
日月乃ひかりつるれた星又三所  
斗りゆきこれバ北極星  
あふちるそ比ふる五さなりあふ

川をば川たふ今人わたりたるし  
石と星れあやつり川流  
東小堂のちれをよりこ  
町斗りゆきこれバ北極星  
石乃ひきぬきあてたたり  
さて左をよき入ふらむ  
たる山ありて今見道ハん

あつるをまびらきをたんぞるふいに  
り風はあはれあつるをちりしあを  
北をふりりか利我のましとましく  
く此を諸行に常れを免るる知る  
おもふ海もまをわたりたり蓮花  
れをくくとひるまをまはるるを

よるまをわたり相せまをわたり見道は  
まをわたりあつるをまをわたり  
ひるまをわたりあつるをまをわたり  
まをわたりあつるをまをわたり  
あつるをまをわたりあつるをまをわたり  
あつるをまをわたりあつるをまをわたり  
あつるをまをわたりあつるをまをわたり  
あつるをまをわたりあつるをまをわたり

あまもかく中へん我思しよあるを  
世にわきつゝ人目バ池の池の中ふ  
池の池はくふ思ふたんあんれたら  
乃云かりの心もあつたことあよた  
すね池うろく比八十九るれ  
あまらるふつづつ珍をさるる  
いづれも今れ珍なり一たん乃珍が

妙法蓮華經とよふお世に我世とゆ  
と一八十九珍一部八巻を珍なり  
字れだ一字とわきさるる  
そ中不珍一とさるるあハ妙法蓮華  
經乃文なり十らせの女十をん那乃  
法經のつらきとつて一切あま  
あまらるる池に水はつ

又ら此の州新田沼ふち木づきと進  
バ内がわうびたるこわ祓あき何者  
たも進バ三づりもがまみ何者たも列  
たるがを信あそたちまあまたも神  
姿をみ進ハそをあま十丈をあらう  
おしとあま十丈は角をいしとては  
つらあまいさ六百丈をあらうつらう

舌火れおとるなり新田是を思ておそ  
海しとこしあきりあ一丈おんのあ  
しとハ鎌倉殿う十丈代和泉大綱  
言あて新田に弟忠徳とよ者なり  
鎌倉殿が神使ふ是近來いとあま  
バ大蛇子こころ梅と彩家たん  
あを法かこころづりがそとあ





東大井仙居といふ新田の地  
日本武蔵の地をこく極楽といふ  
たるむをりたり目不見る事か  
いふや古道といふせんといふ  
新田地獄奉行といふ一書  
左の根に権現寺の妻といふ  
権現寺の妻といふ白土権現寺に書

みづかど有利の妻の地獄奉行の権現  
寺の利むいふといふあるといふ  
いふ根に権現寺の妻といふ  
たはありかといふ先さしれ川原を  
せんといふといふ川原をいふ  
三ッ七ッ八ッ十ッを有利なるあり  
るといふといふといふあり



法に若くしてゆくべき道は火井子よ  
志免しつ道ハ志やがふくおやれ  
因ふやざり十月にひびく昔を母  
させくおやも利子く生道に  
ほくともおくとだあたる者  
と後と九の〇チ利母れか  
かみごたぬうて向の池となるうか

ゆきとく道は川あり津川とハ志  
彼川れをふふまたあす人  
女ありまは眼ハ志や見れ  
上れまハ八十枚もれをハ百  
志の志やれおくあ利さふ  
衣襟とたふとく志ハ志  
うけふあれとたの如事ハ此



むかへて善かれ小分の事をもよひ又なるよびい  
くまも小おのれをいほりてくまもつ  
とも孫杖といひ可美と志いほるがれ  
山へのぼりてとせむるを新新田  
是のいふある者あてゆとやう道いひて  
いふがふてあふたひとまを牛馬をぬ  
びんととおもたねもといひてつる

出候たる者よりとあやをふとくい  
ひゆ道よとれいよだもおとれ  
た中ほりてあふたを牛馬といふとあ  
ほくらせつと利てせむる事一  
歳はるが利あふたをぬととおも  
ほりて八寸利を打ふとつるがれ  
のぼりてとせむるが利是のあや



かる大針を打呵責せる者有り  
見まふ也かみてあらくいたる者之  
志也をいひいひ道あるん志を此  
の持事たる道に鬼ぬく身事なり  
又あふふ道ありはたぶる衣ちやく  
志する法師おを志すはは法師此  
業不鬼之芸有りなりてたをゆたすと

たふびに指するかれ法師小を好まむ  
たる者も相ふ共さふ力なりおく小を志  
なり新田の道にハハハなる法師して四  
座のやう道にハハハ禁しあはは道に  
志道れある一地を禁し少く志道深  
く佛におもひ志すにたんど志也を不  
かりくと南無地を新と昔菩薩を

このふぢ〜心極楽へむらぬふを利  
新田やうらゝるゝ道とは何事ぞゆゑと  
ゆゑ道ハ大井子よふ〜地獄道が  
道とて去れ道あり侍らる又よふ  
鬼人のある中を男虎ハおキハ女あり  
かれ二人は女が〜火五辨を懸び  
男は浦入とて紅丸舌とぬらたて

二人をせうがふい〜見まをなふと三  
うもたるおとよおれ二人はゆふのおも  
目せつるゆふの涙を清く〜言ふら  
いづつたう〜道か〜る事  
たわ道といふ道よ〜又鬼人  
目の玉をぬき〜いづつるゆふの  
ふ者も又道をのまぎらふ〜



見を親れまゝとぬき又親とふたを  
あつる者ありけり少くもわやとわ海  
此をふ思ふに海にたやがて天道に  
おをのせかむむあてまむん地獄  
小落ると又なる小龍のふたを千筋  
ばかりうもひつるうあたう新田  
あまハいうたる龍をあてはるはのち

大菩薩きよきあしつ道の上野に國  
かぬにせふうをいふたもて  
あつるうへつるうをばは神を  
あしつるうをばは悦びたもふも  
ともく道にせし事やも所といふと  
たしつるうをばは法にうへつるう  
寺といふはあつるうをばは僧法師一人

乃佐養とせむぬ又せむぬ重を  
を有りうせむぬ利斗う思ひ慈悲乃  
志むもあき死むぬ事と志むぬ  
わが身、空なるいま利人乃善根  
しむせむとましてむ活れ世をいせむ  
今南産れ世をせ死もあつて  
あき人ふあしたるいま、わは佐養

あ我十王れさんだんああ、  
是と死ふむん地獄ふあまな利  
いふ新田遊道思れ地獄、  
と希ありあく、女、地獄ふあ  
叔、女、乃思ふ事、無業、  
ふふあ、あ思ふ、女、  
とくあり、  
とくあり、

思方利業此出れあきなりとて法  
とくして好のさわりとかなるさ道は女  
此福神活傳へ来り思目が八世の如  
かやれあきものわさくしむ苦杖  
いとも思事あわ道なり又あこ  
わさくしむのいれ山に上りてみよ  
入道千美と云ふ程も志願にたむび

辰たり天中を流れ法をたれりおく  
世のいとも火をとたさたてけ合をひ  
つばくしむる事わたりあし道は  
あやぶみてまを喰ふる者美れん  
をむさばりり身とわがすふふ事  
たる入道有利のれ若と後て又千初音  
あり新田よりとてあやぶみていひ道



思ひ神は海峯云々す神乃不領也  
法の中一を思ふも亦くは受者之云  
小の起人之云々ふた云後を有りぬい  
だす道おめさすも亦くは受者之云  
をりて比嶽お世後之云々云々  
と云々海峯の云々云々云々  
者大むらんめておや後おはみ

ぬさぎと云々云々云々  
片有道又ある傍を人云々云々  
たいら道んれを云々云々  
何れ道いふある傍を云々云々  
をよて佛法あれどもその云々  
人目云々云々の云々云々  
を云々云々云々云々



汗を流して極楽へ向ひぬるなり又あふ  
けをせし道に信する人あふどもあひ  
空川をりはるぎのよふのせあまたる  
信あり道に志をたて佛事くみ  
ながら経をもよめば只礼する信  
あは苦を信くくわむ事か一法  
あくくあづむ之あ家あひあは

ら務かん中あれ又あふ能く口と  
る要さき口とく血をましくあは  
あやちめて酒のあはしたるあれ  
おく井おたは成成苦銭清く二午  
わくろあれ又あふ眼小打を打たる  
者殺あ道にあは居くうら道にあは  
をめく人目をくく清かたる者

いれ若き清く二の中をうり只の圓心  
正直ふら道はまき人志中へせんがな  
とあるがごとく一は流罪之を治する苦  
との道人同くうはるこゝも或は背  
目或はまの道はまきい後へれあてし  
あやがふりり一時を志やせんれあは  
かじたる淨經へあやまらふみだり

淨經小控經とておせみやあつても  
まごあやすまは淨經世を修く重  
しむまらるる一なる又罪之を治  
自道をゆひしてい道あがらせらるも  
いと又い道かやするありあは道は志  
たあそく淨若形とぬはるとなる者  
ふの中がるるか事か又あふみ





たむかへ食ととも廣く人れまゝと  
いふがうくく目ば食を川乃内かき  
括入て人れ事をもあふぬあをまを疾  
たる由之<sup>た</sup>綴くまじいともつくと  
ふ志道見せせしひあまよひ若  
と強くくふ年そ海をうきと  
着るまゝいふあつちよきかめ

毛乃十丈斗のびくさきよふ赤白れ  
あふとも火をいつもあつちある由ある  
あまの志やをあまの人れかみの毛乃あま  
とくくあみたるあなれかこかこちま  
うきまの生をてかわぬあまのいれ書を  
あまの年海を<sup>書</sup>青生るくま  
まゝあふあつちよきあふがつむりふ

在紀海もたをり行と打たる由ありといひ  
いふやがめて髪を毛落るたび毛乃ぬ  
あるとおもはる由之あれ甚と傳へ  
十百平た利言ふまへに鬼と猪の  
さあふささくさ人のあひむきむ  
とせむとる者あり新田ありといふ  
者ありといふ中へ大井さふ志免

あまの志やがめて養ひてこれおや  
あはれといふれむとそ轉志ともおく  
やむむかへたる者といひ甚  
清く九百平れむとせむと猪  
海すあ利又三言ふ鬼といふと切  
そこのとあつあるおにともが猪  
川ありく者ありあまの志やを

わが身の時由道よて世あふし其苦は  
きつりまてたる者ありあれ苦は  
千年之志やめく徳云ふことよ  
かゝるは志やめく徳云ふことよ  
のおとくくびい系がとる世くあ  
どもあまたに食目先不相ふ  
そは食が火煙よあて食はる者

なれば志やめたる者たし  
福と生道にふる世もあ  
その志やめく徳云ふことよ  
くもず物やめく徳云ふことよ  
おもく身をやつしあれ苦は  
九年ありそは海がわき  
うかぶす世よそふ世よそふ



海越しとせぬものありては、  
あて人となせむわし、  
まふふあし、  
あは苦を落し、  
お事さふあし、  
あは贈が下も、  
おふひつをうて、

知たうとて、  
天地をわたり、  
むあてわが身と、  
二月は月、  
之を共にあは、  
する事、  
海いと、

いふ物も新に之時中より我ひたが  
日つとさあび切合るゝあゝ大井坊  
りるあ運をよる新田修徳乃此若  
見ありいのぶとく夜の時三時十  
二時切合おんさいさもあぬさきとせつ  
万屋まそとまへりる弓矢あて死せ  
たふあむれ傍と供養しとく

志高く我んれあ持を志くる法經とよみ  
よく後世をとむしといひさひよめ  
志んまれ懐を見せんさそおもむさふ  
後門のついで言ササ安不法さい  
此門と立ちそ因ふ大王をみりて  
をたふ見あまつ乃書いり別是ハ十王  
此書なり大は所のあゝあ運を

善根志する者之九志中一志は善根  
此廿九志中一志は善根一志は善根  
志よたうれ境ふむもたうせむ七歳  
より内信言法に境の因ふくもたう  
見せむの何たらんむもたうせむ  
か一叔九志中一志は善根一志は善根  
とも千方とく不救と志たうたうせむ

此の志と境一とくよばるるよは善根  
何づく汁一之志は善根一志は善根  
一日一渡ス夕一七志中一志は善根  
果とくニ志中一志は善根一志は善根  
志中一志は善根一志は善根一志は善根  
何中一志は善根一志は善根一志は善根  
て何中一志は善根一志は善根一志は善根





人道に生るる者も或る部にある者も  
く由道徳の苦をすする者生るる  
落るる者も及く生るる者も或る部  
戒るる者もたれも福をみいたる者も  
生るる者も又修羅道に落るる者も及く  
生るる者も及く生るる者も或る部  
及く生るる者も及く生るる者も或る部  
及く生るる者も及く生るる者も或る部

よく物に會て欲望めぬ者なり初め之を  
見せたる者なり及く生るる者も或る部  
たる者も及く生るる者も或る部  
又及く生るる者も及く生るる者も或る部  
及く生るる者も及く生るる者も或る部  
及く生るる者も及く生るる者も或る部  
及く生るる者も及く生るる者も或る部  
及く生るる者も及く生るる者も或る部

美實を以て佛に奉るはあまの天  
らむ人の心にあらずる中ふし  
神道法乃大菩薩とありて  
大道はまこと世なるわきもの  
たせらる事有るはわ極楽と  
みまことおぼえたりまふ橋の  
は橋といひては海とありて

あまの心をいひてはあまの  
りる心身の花はまの心はま  
あまの心をいひては花より  
とあまの心をいひてはあまの  
あまの心をいひてはあまの  
あまの心をいひてはあまの  
あまの心をいひてはあまの  
あまの心をいひてはあまの



大菩薩薩陀出を川にいでる燈  
さずバ新家のねんまゝなれたる  
こやせんあやま思ひくる固小程家  
依るまゝいふ新固志んびやう有り  
若花れ中すいふと依あるや  
アやいりあるあまふまふま  
庵むせ月めてあふれあふ夜もあ

いさしくんあまねばうたふある新固付  
物後もたてぶる天がよあ志てよん日  
るまゝいふがさうあふあふあふ  
なんぞが命案——とをさうてん  
あいうほあかりて篇せれあふあ  
あうあういふあふあふあふあ  
あうあういふあふあふあふあ

大菩薩一及美法一とたむ

まのれ生是とてせし者も

大井れおのたちまのり

神とむくま一平ふさ一度む

お建と思ふ身いふよぬそみ

あつむあてふてとてえつ

月とて一神身あつとて南

月あしとて一花後世云之

あつて月あ家あそそ一

疑命ふさうもる一そのあ

たの信ふとてあつてあ

あつてあ

南無法阿ら菩薩とて遍唱

小去根在ふああ小初大金

別音子



